



中村俊定文庫
文庫 18
405
4



李撰文選卷之四目錄

一 四序辭
 二 酒論
 三 解解
 四 接衣曲
 五 卜宅詩
 六 琴琴書畫文
 七 士農工商每
 八 松竹鶴龜頌

六味
 飛溪
 六味
 交梅
 桃溪
 交櫻
 桃溪



李撰文選卷之四



一 曰李の辞

六味

人本有よあはれ何そ感あうらんらふはとんはり
 了そそ夜よおやへーりされいーとせの極りゆくや
 くれり色の文まよよまふーてかうまひいおへま
 云の如もかろほじど曰孝おくのひよよま色り
 世はさうごのあへあるあーいよあもまとらてた夕
 よいねとあひして大極とまさける高への極ひをそり
 かりまよあはれい自然の感情あかひんさるまは
 詩なれ人のまもししたるあとりてあつけはあし



さらばは世の人をさあする相とせし冷しれた師走の
 月さへまけて木履のまゐいてりつと煤竹枯葉で飾れ
 音もあはくはあつてくは解やくと叫りけりる塵は
 友もあつてあつた物よぞ極やうちかかんけ
 雑器くの神代めさつるふ年肉のままとて極
 赤繻とくまらやよ海神神布よ入るまはまも
 交りてくれあはく玉がこれけりひまけく怒りあは
 おりつといふ物とまはゆるりつ何づまの方よまはぬ
 人よまらつはるり中よ飯くくまらるかまの物も
 と待て一杯のあつりのおまをと待つたあまを東坡と
 物あは古人の備と用ひすまをませりまをりぬあ

病施り嬌とあれて涼く身代とまはめりつと
 神湯よこそ今ハ飯とまはくは難の庖丁と用ひて
 甲はつてくはあつたのけあまやつとつとつと
 扱あるももも口あつて口まはまはまのまはまはま
 りんごもつ極りら極まよつとつとつとつとつと
 おひはあはあも結とて中や飯をまはつとつと
 うつねの枕の上へ解くとまやうよまはて福神双六
 乃中双六よまはままままのまはまのまはまの
 うつとまはまままらおのりまはまもまはま
 つとまはまのまはまら松の内はつと短くまはま
 七折うまはままづりけの柳とあて神まはまはま

ともかき〜恵は次士器カハラチらるる後ハ膝月もるごてに
 さら〜はは梅り日ヒ〜この外ハまめれた地ぬの
 昔よりえあるよ千丈根の一は声〜そ聲よまを侍りあを
 おと〜はうら〜あるのく〜なま〜と大根の婿〜地ふ
 独活ウツロ蕨〜さそ梅の葉と不〜ちづる〜氏ぞす解茶
 茶漬のむかび〜るおれがま〜の桃のむむおまのちまな又
 ね〜柳の巻ハはは梅り〜梅子つけてやりおあ
 くと〜呼つ〜とあかり〜顔面ふくもま侍り〜と
 つ〜子比のうす腹〜ゆ〜つ〜いよあたんの
 田舎共又ゆ〜網やくのむ〜いぬあ〜あるのれや
 ふのおり〜つ〜いよはまのうめあ〜ま〜其狀

をぬて卯舟のを〜て敷あるよお給さ〜て
 卯屯新茶は夢清比のあ新氏のい〜な〜
 め〜たのよや〜と〜の精あ〜と
 おやつ〜たお〜お〜お〜と
 向は經倉い〜と〜と〜と
 穢と惜ました〜は〜の〜の〜と
 呼〜る〜と〜と〜と
 よ〜と〜と〜と〜と
 の〜と〜と〜と〜と
 ら〜と〜と〜と〜と
 男め〜と〜と〜と〜と

として入梅の端をむつと終るまで梅りぬすもかれハ
うきいさゝかへいそふふの虎狼よりおそあ
——とやすおちや——茶を来くと呼ぶおち志然りて
尖ゆそれよ二夜の苗よいつり晴て水無月の夜
てりともるよ七月の入りぞあつよともえんどの蚊屋を
色晒漬とかなりすおちの虫は種は價のさる下と受
むるとぞ世はあう——此小車はあへどあう——海は江
こぼすやとおおぬふくちどころよかなくは此あくの
おちとゆるりとりとへ——十五日の朝まぶたは雲は走
呼かく太赤の志る——あつぬ蚊を愛ハ片やさらけハ
くまこしふおとづるを梅く終る早いといふらど

おちとはく終のらとちやつらぬと種冊行七々ある
と日あしりのをえ又おち——と色はいらた致いたけ
おち抱あう——何とぬきと夜あるもいこい——まねと
ち——して盆挑灯の愛さうなるとの也さ——終くと
いふはる月果のよけけし中の陽音よやと火のりや
かく漬て茶ありのかあ——さうよふ火せん香よ牡丹
と——とあまおちさ終の花とんせと能信の武よふお
まきるむべなりら——と茶内のあるを梅結んよあ
おやつらあつとやうて晴後まで梅の茶下——とあく
時初草ね草のあまに——あつぬのよや十ああのを
や——とおちまら清光早らおちよ濁り海くとお

久し振あすまののびとていひく一宗紙は師の
 名ももよひゆきぬまふら一掃又女の調子いり
 舞一それより枝にをとりやまらりて鐘の音あけ
 よまへ舞をとりいひるまうらむや舞のこころいり
 枝の音とまも鈴もあけくをた声入枝夏乃
 うみおまぬらうまやとほの月おまけも舞ておほ
 する舞素の初こた酒をの送よまあるも中ま
 おやめ始ありう一密林柚子る柳牡蛎の歌それら
 中へ懐子一たる男の古念歌一そおわけらるる
 しくいひまげよあなまもあまよしきてあはるもあ
 舞の基はあうらりよて舞よあう一舞いりきと

心の強氣の色音のい舞いようらりぬん附一そ
 くのあまおまひい舞いり日ぬんやうて十二月の
 十日よあそくらそくくし舞いとあめあすべて素
 人そあう一くおや(ぬいぬの昔あまいけまう一そ
 あそそんぢくはあ枝の舞うあまよと踊るよ細く
 ちをさるのこ一いひるあまよ舞一炭は素いらりの六
 葉まうらんつけ一舞よ一そあいのうまあまよよ
 舞よあうらひの皮のしらつけのまうれらよあけある
 絶貝あめ舞よそま舞よとあひそあはらうま
 とくそんやあまのそつきて舞舞より舞あ柳一
 舞あまうらひの月もは柳舞として百花の魁と

いふは東の海に舟を築くは業とてめぬ

二 酒 備

飛 渡

漢書とていふ少くは百葉の古雅有る實と後を
柳の巻は遊子の巻と名をこしてさよふかび春のハ
は戸のうらも淋と紙を立せるまのつらな屋敷の
七器は年中の邪氣と除くより無事の白鳥
桃を梅とてさぬ人の世一く春内百ののかんあハ
首飾りのさのさりよ媚む七夕の素麺は八世ハ
あゝぬかのさいじとや菊のさめは花のまおをたか
らげ馬といふさぬのさよふくは限一巻も

素面スメンよてハ心くから一婚姻の純子のハめ蝶お蝶
とひとがら一花ののれ物よち海を大根をまよと
好むは春よハ夜茶と名一おふよまこすイキとむ
るさのてさ整一珠玉と飾ハはるさあつと毎
ちける座は風流をとり中一た標と案一むそ一
琴と鼓一付と試する之の友と交りも世その
力誠借しでハ夢中よ残あさくら此やすん夜は
名跡よ傾け一茶碗の二玉ハ整くの形ハよ一
能治成りの深更よ婦つらつらめてふ時の
需めとまつこころむける夜よ身立の味いと
知一樹村とてさる憂とさる一はりせがしは質也

お菓ころろしほていらるるをれもゆるされ大なる
通一自然よりあり別まの来たるなり一
杖原にそめる又たうらひの大き悟せし和尙もまた下戸
あつぬそとてうのありしるゆは師もなるる鳥王
とそを周の代はまし海いづかよんからあれたのあり
らめすべて抱ひよつけ徳よはあけ抱かくてあ
一口をひすうに後世の世衆の志物也なりなり
ありりしそまをそとてしそ文より武よりうつり
小戸中戸を越越して聖賢なりなりあつたる
こつり大戸とるるぶつらふのめとて辭しあ
と友とらふのそひんあつたなりなりなりなりなり

がこそとて事のほにわらうらふまよはかりしそ
有方とあせとそをそせす咒教秘法の功も疎く
系すべのぬくあつてしる有やあつたりらんや
二とせころりの福は杖後の山名とそあく杖のめ
しるん地して有り又あつては母の胎中とあるなり
子満生昂とてし息下戸と後して者と受へす
と徳あるある回友のあつてむづくしりあや
つ日の病よそ其業とそあつて友よ及むに
性痛れあつたなりなりなりなりなりなり
若て吉ふまなりなりなりなりなりなりなり
あつての吉と試してははははははははははははは

つらがるはなはつと願ふとてなほなほとてまゐ
 申し是非を分ちの七加減よおのれの新と申し
 それもなやまをいせ余りの昔と成しとて
 まよとてよ一生の變化かへのか一願二生とたの
 とらふ一まはれ後さよ志すはるのまづたよ一
 ぶるゆと知ていまよの死よ志するゆと志すは
 いじりうまの死よ志するゆと志すは
 志す又愛して大よとてはるは

三

解の解

六味

情まありと味とてつらがるの情まありとて

情弱の一病まうして世の中をぞとて又解とて
 今ハ昔山ありの後地りて好セーがうつ其解を
 つつてを解とすしてはま子蘇あつねど竹の皮は包
 そのとてはははははははははははははははは
 ぐは抱とおするは月とてはははははははははは
 朝ごの朝ごさとおするはあはははははははははは
 恨ひはははははははははははははははははははは
 い腹の歎はあはははははははははははははははは
 ねららずまよはらつははははははははははははは
 何物そやいてははははははははははははははははは
 抑知洲よ石洲の妙よとて解神ははははははははは

孝と穉

全

よつてつ呪儒仏の法とやされぬはともち由は下略
 けりく呪りわらふよともちぬへにせしむくは海の
 ともちも海の通顔あうそもともちの園の形と
 力よそたし下よそ流味といへぬいひこれよといひ
 いひいひいひたしあうまよそいひくもくもりあんと
 いひくもはりいひまといひ称ふの義くかんといひ
 いうるあうそ色のいひはいひるあうそおかんといひ
 児女子のいひるそ美カニと其とのち流あせどいひま
 ちよそりぬるや海よあんとするこころなもあられかき
 りらと松花せしれがすて下るこころのふは海ふ
 さへやの破てそ海のまかりしそ桃のふはこよはるハ

つきぬ悪の人よもりてかろくさくむくつる自然の
 乃とよし下よそ海よそと動をいひ海よとよそく
 我是よして人非あるあそあそ人非あしてよそ海ある
 よもあそいひされいひまをかして市中は海とよそく
 おのこあそいひまを携へ来りてなこまよふ海よと
 注す下へいそ海のはとむきてすはよのらあ海イハナれ
 交りあらん甲と餅よりら屋の風味よとよそいひ

口 梅の夜曲

支橋

山々の尾はさびりあそぬいひくは夜寝きたり星
 をと枕とあそいひりくはあそぬいひくは星の星めしはれ

とさせとほすも糊すまよとらるいふし女校の家
向つて春づる朝の忠女あふよとを兼りてらやれあや
いくやをせんぞと出さる一たふりてしよふおん原
そむけてうちもねあん結女昔の藤武うらぬ
水針のおよ横より海をさくうつ夜あつくあや
ね柏子もあはれは海山をたておの万葉まてしをく
いあしともめぬのちよ海をさくし川邊秋の敷すす
かりらる君とすむむいようは山まよあともなうら
結とおりの此鳴声かなくよめく神被一の海うおち
そへてらるくやろくかす夜うつや話のねあふあは
君も君いとせめてあはれ一うとて玉枕あは乃とあふ

あはれあひつはい海とうつあしやいふ人をも
人さしつかい原の秋をいこるやあつらん朝露のねも
やよらして風の後のつてあはれ吹されく志どろもど
ろれ柏子さうしともあはれあはれとや君さうまう

ト完 詠

桃溪

向日式ト完 變ハ十六の葉より芭蕉つよ入てち中
よはゆらり番子よあこのつらりあつ子よと
よふあはれよあしとらるいとさふせよ度一番子も
集あはれの日必兼りてあつんと求め必揃あや
いふ冊あはれト完のつけ一そくそれを桃溪の

善武治よおしきし時をいま榎林の盛ありし
 以て下谷ありの律儀をおやうとよあよ

白果くそと綿袋をさしてて

とあかおの句えかるおうらうらおれよ親が災せし
 人へ救十人きし申すも二十飲仙の連中ハまじの
 道よありしとねえおれをせしれとやト受て
 猫のつままぬしづもぬひりり

と吟して廿人のお世は探るるされどおれは涙の涙は流すれ
 ら涼くけりりいふお世の枝よ枝ぬ者のまよとおひ
 古よの墓まぬぬるおよまぬこらうつらひてよりつらく
 死にん任の賜と探り比の蛇のあは音と歌んでおよ

中具一匹のぶねとわんわんいりいりいりいりいりいり
 泣市のあぐらおまらまらいりいりいりいりいりいり
 およとあしといいざいざいざいざいざいざいざいざいざ
 りのちよとおくおきいりいりいりいりいりいりいりいり
 歳い年い人回いりいりいりいりいりいりいりいりいり
 余よの内いりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 尾湯は洞空おきいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 は流きてあはいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 人のあしあしあしあしあしあしあしあしあしあしあし
 地よはほぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬ
 九十二歳のころ年あはいりいりいりいりいりいりいりいり

層くもつる寸方のふんまぐらへくも色くよ
崎をまて穢世もあさひなうーとんおれはけうたひ
捨一句く皆ふおの穢世あへーとれたていすま及
ずくを即是か此理と示して行かく息絶たり
と苦ありぬるも歎く交りくひたさくも色奈ま
へとせとらりよあんらー百里の外よ在て其はの
加持水ともあせさりーとそやおあさくもさあせ
生涯いたよすまぬひーくおれはいつくの佳句秀ひ
あつてくーくもあへく昔あるもあ茶小紋の布子
の袖と負よらてくさあくとほある花姫の鈴響ま
くづすくお成りさこの電か

と紫糸の代句して冠里候の感歎よ歌りしを
け雙のゆ也らり其冠里候も紫糸も皆黄泉
の先客あせはく者留まなれば舞はまよはけ
あつてくさあへくおやへけりて

庄嚴とこそや向の世れ被岸あ

六 紫糸茶書函文 六味

ね、辞

山の昔いつきの時よりさらんは生も廿日奈り山極
咲るはあふくよこそをれうーこのふんくも海めて
玉とり海さこの乃よんやそをた紫糸のたせく夜よ

風吹あよ空を熱とさげらる後よ一車草の火は一掃のあ
とやいさんさればいふまへに流すははらうしよは本まよれ終よ
降り蝦の志どれ涼流とこり一徳竹のそよれおのつり
りて一局の上よま白の石冷^{ヒヤカ}りて類然しは海
然然るをば師教よは一いつことす其意れおぬ
然たる徹や棋局も世と消すとひらんむせうり
そりやあまをさきてんわらんよふんせふたひも枯ぬ
へそりいひあうら清原と収むされい家いりはし
河若の教もいあうらあらんさと種矣湯と右にでかけ
其あよ神と旁一松古よまよして終日を後のうよ
ころこれ其神尼のむしよまのわりのとのおもむらんか

好きて蓄ある人い好みよめそて換る人いいつめこりて
あつとるとそわーと能念よいあうけけ境すますい

書 箴

あひと其意のいつめて人のとくまよふて業業なる志に
響くおくと其口のなれ出とおよめめよらほとよ
ものよそ何人の地するよに十八顔の自在あるあり天
地はりこれよのますあれとて万老は世もよめれとよ
事句はあつてけあれたありんたれとあしめてお
そよ上は出れと又意も務も其器用次第よ其人の
家と成は讀よい百懐うま毎用とあう好くは下
ぶあのもれは極しは其あつて其あつて也極と昔くハ

あつた百の年よりあつた十年來、東洋の一流日本へ
渡りては、東洋の思想なりをたぬとて、夫とて、いふ人、情
の考を、いふ下、此、能く、して、た、中、を、より、た、家、を、上、代、の
依、理、に、成、年、と、い、ふ、古、新、の、流、に、い、つ、つ、失、ひ、て、明、を、
海、に、は、美、と、慕、い、つ、る、に、晋、唐、の、向、上、よ、さ、り、の、や、り、て、ハ
古、帖、に、黄、帝、と、費、一、お、の、せ、い、人、や、り、と、い、ふ、あ、る、も、
亦、あ、り、つ、ま、へ、て、あ、り、の、ハ、其、人、の、位、を、て、る、を、
の、書、に、より、士、大、ま、い、下、唐、人、を、は、し、し、律、義、一、遍、の、格、上
よ、て、か、り、あ、る、所、と、い、ふ、よ、う、に、い、ふ、よ、う、に、い、ふ、が、
中、に、僧、徒、儒、教、の、れ、文、藝、の、考、を、い、ふ、古、神、の、部
あ、り、て、も、此、も、信、塵、と、交、へ、す、け、る、く、書、す、へ、さ、る

自然の操、如く、何や、し、也、を、書、せ、し、人、を、辨、別、し、て、其、
其、意、也、項、け、り、出、は、姓、名、と、あ、る、す、の、こ、と、い、ふ、東、坡、が、出
た、姓、名、と、あ、る、し、て、体、す、と、論、せ、し、も、い、つ、り、ハ、我、の、
英、勇、力、ひ、と、い、ふ、文、字、の、女、子、を、れ、と、り、て、や、ま、れ、せ、る
と、い、つ、る、知、言、あ、れ、ハ、始、より、無、常、因、然、れ、女、子、と、い、ふ、け
こ、と、と、い、つ、る、中、の、妻、矣、の、牡丹、餅、あ、る、し、い、り、ハ、通、判、が
為、一、也、と、い、つ、る、は、信、た、と、い、つ、る、信、を、い、ふ、表、を、い、ふ、あ、る
い、つ、る、さ、り、と、い、つ、る、黄、帝、把、了、と、い、つ、る、一、矣、上、も、天、下、此
律、よ、そ、む、け、い、つ、る、あ、る、い、つ、る、も、い、つ、る、い、つ、る、ハ、其、時、を、
人、の、あ、り、よ、う、と、い、つ、る、い、つ、る、中、の、ハ、實、定、客、の、後、と、い、つ、る、二、王
の、第、一、と、い、つ、る、媚、い、妖、情、の、點、あ、る、ハ、女、文、字、の、整、り、と、い、つ、る

百家の彩、灰とひ蛤のさうず貝とやらんや、
妖術よまどひて子、膝う竹も補之、梅も其効力乃
事ひひめると知つらんよ、画よむとさる人と云へ
かの文素とめてやのめうんおや、鳥有ん生あるの
ありて難どて田よ子、つとよくさるやと家者て其
術とあつすと生、生笑てあつとハる、備之我の、
熱して日用の茶飯とすと不、俵のれよつとハる、
中術よむしてけ、起とほつとや、何とさるる何ぞ
白帯とつとく、あつとす、る、服の人あつとつとく
子、あつと母とつとて、あつと蝦の眼とがさん、
大よあつとこれとめて、四、五、六、七、八、九、十、す、
とす、とす、とす、とす、とす、とす、とす、とす、とす、

七 士農工商、各

交換

孔子の曰く一と指て十と合するを士といふ、
と或といひ十一は明かあるとす、
一者湯の始あるとや、これハ一がとが、
始終とあるの、
ある時代の、
あれハ十と一と、
るよ、
外、
に、

おのちよはたせられる者よせむに勝てんかの弱きものと
 あつてざるぞと教へたる又つううう男とんと磨いてらうぞ
 の山よん越え入るると見るこの舟の古きものは程の二河をさむ
 やうう己よはたせられぬより首をさしぬ候と世話よー
 ころあつてこのあつていふはさや話と画くものよま話
 づいて魂とまひーおひあつていふ一話のうへに剣
 射御砲のたすて何と^{まじ}と叫ぶとそやおなはるを
 手御の藝はるゆいといふらんううー士は方理は通せ
 ざればを退く塵よまえんえやー又もまよふまよふ候よ
 右よいふ話とさるこの候候とあつてこれうおよそ
 いふん抑もまよふのたや度さるゆい子もまよふは後れぬ候ゆ

火の火ん橋よ起られは見事よいんせとらんうー七つの
 ことと右にたよるまんどー夜更に自らの命よ布とていし
 詞よ志ころとうの御りといふれ文字より文字よ傳へて
 実よあつたなりぬうも其は生も指さるの御話あれは
 又いづうかすすや夜よとくは方今將とて士卒と
 指揮もるはこそ大將の方すく其あすといへ先人の遺を
 ゆめぬ御百方はおー及やせはてこの御地の利はた人れ
 初は夜よ自をあるー是もいふかつた城の壁とおもよ
 同一かぞや其もまよふ候のゆい百方の命よと吐け
 してまよふといふ人同士の御りようう候この候候に
 ころあつてゆいぬらんうそあつてまよふは後れぬ候ゆ

藤とて愛ひぬるは是大軍の分りあつてやすへてさる
りのせよつなうれはるは武士つげぬるやちん兵をすく
余力ある時ハ清盛のありとて探りて風難とらぬ
んよち孫子う十二の海も虚さ夫ハ高よゆらふは死
の妻よ踊るぬより一夜の指れりぬるそ方のあつての
とあつて心裏の出信ぬる孫子ゆきよて致しやと
止め十一とあるまの武士とハ行くあり
「武士ハ八氏の称あれハは農よ百姓の事ありとて」や
丁百ありす共十六あるなりとてあるとて先ハ高の
苗代ハ高を義とてさるめ部となく田植ハ高れ
此の川流とゆりて秋の収穫は高直と井げたり

法の苛^{カラ}うぬより穂よ種をおおの小櫃乃^{カラサホ}遠か茶に
は方ハ面兼をおおさめておらんこつれやとてよみも
むいありとては穢のそちやとて高の係統よち
聖なるの齋とさゆりあるやのねは高ハ清夜の夜と
ぬらほそもは穢の危さやある早の妻ふるんで高王ハ
時よ何を候小町ハおられりは時何の御とて其方城
安うらん高よとハ節序の心身より地裡の事ハ高よ
あると顔大佐あるへやん百姓ハ思あるものよハひ
あされるそつ高よハ及ますありとて高の妻化とてよ
毎へて高よハ仇とてハ高年よ高と茶とていさら
油秋の空加とて高す耘耕の二よんとて高めて高代

不易の功業といふも、屯子の道とありて、鮮哉
徳りをもく杖はたすけられて、老圃の吟と兼めや
つゝ一変化といふ、茶法の條にあるおひれのみ也
扱や、此の工よ、起りて、ほろと、いふ、人、農より、ハ、一、等
階級まで、被、理、事、の、交、り、と、あり、祝、詠、準、繩、よ、お、の、り
ふ、の、由、と、い、ふ、い、う、ある、倉、庫、意、圖、も、け、り、の、た、く、と、ふ
お、れ、す、つ、つ、く、り、お、じ、ぐ、一、世、の、勢、い、と、い、ふ、新、始、棟、上、の、後、武
ある、一、為、屯、田、の、素、絶、う、つ、く、ろ、い、柏、亭、と、い、ふ、一、松、文
い、と、い、ふ、や、う、い、ふ、み、上、ぬ、る、意、意、の、秘、け、も、烏、兜、の、か、ち、ち、も
す、て、お、も、深、ぬ、ま、の、加、後、ある、へ、や、お、る、よ、お、り、の、社、神、ハ
殿、戸、の、お、り、子、ある、い、う、一、秋、明、の、朝、よ、ハ、殿、づ、ら、り、の

ゆ、法、も、お、り、ら、る、よ、お、お、つ、つ、あ、一、番、通、と、い、ふ、に、工、の、條
よ、り、て、概、の、お、き、と、扱、い、の、お、つ、つ、と、い、ふ、元、安、の、内、よ、味、た
一、番、大、子、と、お、お、つ、つ、の、お、お、い、て、行、お、お、の、お、の、お、も
い、う、よ、お、お、つ、つ、の、お、お、い、て、お、お、つ、つ、の、お、お、い、て、お、お、
お、お、つ、つ、の、お、お、い、て、お、お、つ、つ、の、お、お、い、て、お、お、
け、の、表、と、お、り、て、お、お、の、表、曲、尺、と、い、ふ、お、お、い、て、お、お、
材、本、が、い、つ、つ、お、お、い、て、お、お、の、お、お、い、て、お、お、
く、り、お、お、い、て、お、お、い、て、お、お、い、て、お、お、い、て、お、お、
へ、お、お、い、て、お、お、い、て、お、お、い、て、お、お、い、て、お、お、
り、お、お、い、て、お、お、い、て、お、お、い、て、お、お、い、て、お、お、
お、お、い、て、お、お、い、て、お、お、い、て、お、お、い、て、お、お、

又高の上より其筋をまき一箇よりつりて公器
 町のいりひのりよ日村の光と争ひ有らむよ指て
 炭をなせうとむよ子をたて周よはよ致と母
 とせんやを若しとせんやこれと秤よ置てんれ
 屋強盗も取戻切とんむぬ方そ安かるるは
 我らのやと直欲よ其の善業ももまをつむの法
 とやせんたれとちの徳は固よんす世の換はまふ
 取きてまむら百費の値すはよ果ぬんはま
 しかすやを馬利倍と合するのせあるはよ其業よ
 うとた何やまらあじんはよく虚業は自在あんお
 きのれ換もほふくらの徳をほふかてぞと高屋

のちりえいちあつくはよ世の世やうひんは民の
 上と出とい世農工商のこまの職はあぬいりあは
 ちの徳は流のゆんもまうす只るはとりのいぬ
 これも亦そ業とまうするあはへこれといは民を徳
 せいな食位のこまは三やよ用もて天下一り
 是あていあうく一掃や士も其路よ存くはして
 格ふれ用も又い民の中は喰ひつや其後せんや
 まりあれが仮格よ後かさぬらうの三民う及ぬ替ひあれ
 口の路よたすもことらあすやたれは今太柔おはれ
 合ておの通り職と忘れはけられ替んてらるのぞ徳の
 替民として民の中は帳をのむあるへとせもくと其

任の事此造次懸沛りしつゝあゝや

八 松竹鶴亀頌

飛溪

此まの三層よ士農工商の起ひより松竹茶出西の口つと
賦せる又孝ふ慈とんと、保よ味坊う抱するあつた
文字の飲よ酔る友垣かりりそよそれりてと
つらよ僕松竹鶴亀とゆりつらわや四季を並の終り
後ひつらものあまひよはかり(白氏)の書法
に對して保ゆとりひひでゆんと思へし
いつりまごちめる友よ保りたぬ書かしてん
を人まぬれおしてお世にぬてん

あり昔ある時らぬんかよあるま牛と賤せり
ふまよとよよの書かとおうす、恒の書よして
すまめ白兎と好まらぬる仙史の凡流と
よあわてるもかり太度の棟梁と
相と削る太史の書とぬりり
あよよかひそめ、松がの枕を
おのつら顔とあひ年とすま
むあらん子とせと持す
をてい、まらひらよま
射るまよ紙とよやねの
ととあひらひらま樓よ松

同氣お求めてよれやぐりよめらんこころいづれ
さるよてもゆひのこのねんあつばとまゝの世の備あつと
花より勝よそといふ古今の世あらん友よ交れれば
友よ竹といふ温玉を七噴六選よ交をりて、好物の
涌ふ飽さぬ君を友と称せられても子戸候もかす
大あるハ私よを能り杖とめてお老とすけ兼雨よ造
まハ風とかりむら雪布よ稚子びせせハ孝感代
御しむる本相山の井と深ハ二妃のあはれよ通すと
つハ冬が夏は瀑布碎玉の夢と表ハ碧酒は如暢
あるより其茶と園むよ丁こころも竹樓のあはれあや
井こころの中よ茶おとるハ不審う川骨小回

原竹よ室を城ちと切しるる末代の名物とてをを乃
林の汁物ありハ女子をよかてう上田のうらう庫よ
納めてすまのまの纏しをりいでや井よも雌雄あり
こころよとまぬるそ物まのいづくは飾をせよめてん記
物始よりすめくたさ松竹の上お鶴といふ大禽
あて又鶴り涼ハ百六十をうして雌雄お祝て子
む小変大変してそころを白く改命ハ天来をる
へい子お百年うして鬱鬱鳳同ハく解とあす
まよ安ゆるハハ鶴の一変れをさといふかり腰ふ
十方貫と帯て揚列よおとんといふハ癒くよハ
訓るへいす費れを命とのせてるを墨よとを

とせ又懿この窮はやりてはつり車あめ
 夏よりおられた御あり之保の松原は信會玉照
 うけてお暇は終るて世ひらるよは漢文ありて玉照と
 ありてと天はし世はむむあづま世ひの曲と傳
 へて玉照とありてつり天は傳ありと、時よありて
 傳ありて世とらひらる漢文とそは人の信あり
 とありてよは以上と致くするよは友とありて吳香
 よは美つて杖志とありよは志むれらるよは眉山
 が後の赤壁をもよひ念をも頗仙境は持ら地て
 はしく思ひはあり文彦の松竹路のこれ世は書中の
 感よ事足りぬさるは地の一草と終らんはゆり

ゆらんは地は甲虫三百六十種の出よて王者のま
 かりかまは天地よのつりよく吉凶を昭しめなせは
 とらふ強よ奇よまれ神ありて一扱よそまよ、おの
 たけよ徳よ強よとらるよのよ衆のこころは勇をかふ
 鼻よなづまて神代より巧よおさるよやさるよは
 かくしてよくむ世ありて氣と天を飢ぶよそりれ
 いくつづの魚が元より遊遊とられた海中は尾
 曳てらるは有業の伸るよさるよるハ智のるよ上よそ
 そよ愚よい及よつれそまよこころもがれ持よよそ
 めるよや匹吏と人君よ一法候と王よあすハ海士の
 國凡よそかこくもこつけよいむりよの遠風

そりすづきざれやよほて文明よつる女子後かす
二箇のふもわかこようせて友よなすりか雲はあは
矢は夢と風いぬち木刀のふれと年ふ口民老よ
葉(ち)を袖おのく其所とめて口藝ますく妙不に
るまよこよは世多女民の沖直と君りふとせや
ふふとせよ松竹と地勢れこく海とと居て何あ
ととくつらと同一さまより國はくはつらて
ひとのふかふかそのすく今おめと云さうしめり

李撰文選巻之四 大尾

叙李撰文選之後 

元俳諧乃書序を見よお守武の
十句弦與書よまろし高下_モ寛永正保
乃ほおつる家まてハ歌林の諷詞
縁語_五らわて滑稽淡笑_者言_哉
はへそ_ハ是也和文_ハ一體_をら
此_ハの用_りて始_り立_し風_姿なる
屋_しきれを延_突の比_をひ_ちわ_ら談_林の

李撰文選 卷之四 大尾

一流起きて文章句法ともさ変次
此体おふ飘逸にてとるすれえ
直つ字法もて奇字怪語の口増極よく
抑揚褒貶乃氣流け城のへり
門戸を立んとの一をちより文場
筆鋒をききしむるん志のふ貞享の
始祖翁格孫此折少しと授かすく乃
あまれを記しむるに舊章一平

あらし新語城述次野晒の紀行を作る
又元禄の始る冬おく乃おそのの一篇
有て四方眼を開志むるふ意詞お調ひ
死實兼備りお始り新語漢家乃こく
文體といふまのいまの分り終むとく
五七句法の教乃ひまあ系ときおとまの
歌と賦して此おみ仙語文章の巻格
を立たり五老井をいふと修飾志す

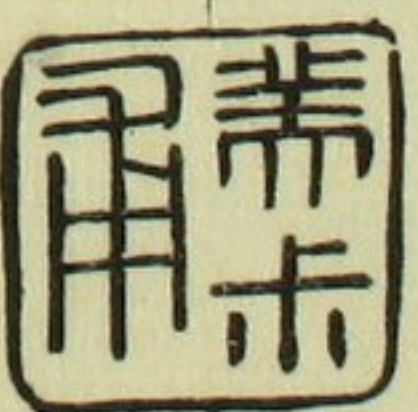
諸門人の作とあつめかの蕭統乃選
 ありぬお次て東苑坊みよく二巻の格紙
 増し文體又操やまふ作みの規矩を
 つ少御しそ體よりほかわらふ擬しある一二の
 文集ありといへ毎むおしく卑陋のおうしみか
 為ぬれを正風の域おむひて一歩千里を
 あやまてあといちん深く見ぬおきくはる
 たり頃ユロ日書肆文昌堂李撰ふ選と

いへおを彫刻務むとて予の云々を
 源人おとをふ河村儀子故もて草稿を
 あふふわて石系に有李柳錦姑あふ
 六味翁の文とそまふ如十章紙輯めたる如
 王海こふ元禄の清談多のえ守泊船乃黨
 小恥事絶まふとけく志大か勉めたりと
 いもあらんや時ちる或此二子起して味翁の
 遺文世みおとけたる味翁を予の友を伴

あしなみ 幸とせはるきやかくあるふ
よありきり序表

寶曆十一年 辛巳秋九月

東都市隱 皐月平砂



續李撰文選

近刻

寶曆十二年 壬午歲

正月吉辰

卷四

書肆

京都寺町通二條上町

井筒屋庄兵衛

大坂心齋川橋筋安堂寺町

辻本久兵衛

江戸淺草御門跡前

辻村五兵衛

同通本銀町貳丁目

近江屋藤兵衛

同内柳原新橋富松町

岩井屋理兵衛梓

為

